

2026年2月1日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教69「神からの誉れ」

イザヤ6：9～10、ヨハネ12：37～43

「彼らはイエスを信じなかった」（38節）この不信仰は他でもないわたしたちのことです。ユダヤ人はわたしたちを代表しています。イエスさまがどんなに多くのしるしをなさっても、信じてあげることができない。その救いに自分を任せることができない。その不信仰を人類はずっと引きずってきました。今日のところにはイザヤ書の御言葉が引用されています。「主よ、だれがわたしたちの知らせを信じましたか。主の御腕は、だれに示されましたか」これはイザヤ書53章にある有名な苦難の僕からの引用です。「捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか」（53：8）とあります。主の僕、救い主がそのように死ぬ。そんなことはだれも信じられないし、だれの心にも思い浮かばないことなのです。

しかもその不信仰の理由を福音書は再びイザヤ書の御言葉を引用してこのように述べています。「神は彼らの目を見えなくし、その心をかたくなにされた。こうして、彼らは目で見ることなく、心で悟らず、立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない」（40節）これはイザヤ書6章10節からの引用です。このまま読むと神さまが不信仰にさせていると読むことができますが、そうではなくて、これは人間が神さまに罪を犯したことに對する神さまの裁きを表しています。どんなに神さまの救いがなされても見ないし、神さまの言葉が語られても聞かない。それほどにわたしたちは救いに対してかたくなであり鈍くなっています。そこにすでに裁きがある。不信仰は神さまの裁きそのものなのです。

預言者は、それをわかった上で、それでも神さまの言葉を語りました。拒絶されるために語ると言ってもよいでしょう。そうやって人間の罪、不信仰を顕にするところに預言者の使命があります。実際、イザヤもエレミヤも預言者たちは民の不信仰に苦しみました。エレミヤは「呪われよ、わたしの生まれた日は」（エレミヤ20：14）と自分の生まれたことを呪うほどに苦しみます。それは神さまの言葉を伝える牧師の苦しみでもあります。ヘブライ人への手紙は神さまの言葉の役割を次のように記します。「神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができますからです。更に、神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばなりません」（4：12～13）神さまの言葉の前に、わたしたちはどんなに取り繕っても、装ってもだめです。すべてが曝け出される。そしてイエスさまもまたそのために来られました。拒絶されることで、わたしたちのかたくなさ、不信仰を顕にします。イエスさまも預言者としてその使命を負われたのです。

この御言葉の役割をわたしたちは理解しているでしょうか。わたしたちは御言葉に人間的な心地よさを期待しているかもしれません。ある教会で信徒が牧師に「先生、罪の話はもういいです。もっと救いを語ってください」と言ったという話を聞きました。これがすでに裁きです。そうやって耳を鈍く、目を暗くし、悔い改めることがないのです。いかに自分に都合よく御言葉に聞こうとしているか。これは牧師も反省しないといけません。人が喜ぶ話をしようとする。例えば「ありのまま」「そのままで」ということを申します。わたしもそういう言葉を使う時があります。神さまはありのままのわたしを受け入れ赦してくださる。それはわたしたちの心

に心地よく響くかもしれませんが。でもそれは罪のままでいいということではない。神さまに受け入れられたわたしたちは、その恵みに応えて、生き方を変えないといけない。悔い改めなければいけません。

そのようにわたしたちは神さまの言葉すらオブラートに包みコーティングしてしまう。今日の御言葉の最後に「彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れの方を好んだのである」（43節）とあるように、人から賞賛されるような心地よいものに変えてしまう。それは御言葉の本来の役割を妨げていることに他なりません。御言葉を語る者も聞く者も共にそういう誘惑の中にあります。それがすでに裁きなのです。「こうして、彼らは目で見ることなく、心で悟らず、立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない」（40節）わたしたちは皆等しく神さまの裁きの前に立たされていることを自覚しましょう。

しかし、それゆえに裁かれても仕方がないわたしたちが、なお救われるために、イエスさまはご自身がその裁きを引き受けられました。徹底して拒絶され、最後は十字架で死なれたのです。そして三日目によみがえられました。そのイエスさまの救いによって、わたしたちは信じない者ではなく、信じる者へと変えられていきます。このイエスさまの十字架とよみがえりにこそ、不信仰を信仰に変えるポイントがあります。信仰はわたしたちにかかっているではありません。わたしたちの決断や裁量ではない。十字架とよみがえりのイエスさまにこそわたしたちの信仰はかかっています。わたしたちは皆等しく不信仰なのですが、イエスさまが十字架とよみがえりによってわたしたちを信じる者へと造り変えてくださるのです。そこにこそ神さまの栄光は現されます。

ここで注目していただきたいのは、41節で「イザヤは、イエスの栄光を見たので、このように言い、イエスについて語ったのである」とあります。イザヤがどうしてこのような裁きを語ったのか。それはイザヤが人々から拒絶され、捨てられていくイエスさまを見たからと言います。イエスさまより何百年も前に活動したイザヤがまるでそのことを知っているかのようです。確かに神さまの栄光は、そのイエスさまの十字架に現されました。「父よ、御名の栄光を現してください」（27節）とイエスさまは祈られました。この「栄光」とは、イエスさまの十字架とよみがえりを通して現された神さまからの誉れ、栄光です。イザヤは人々から嘲られ、捨てられて死んでいく苦難の僕を語る時にこのイエスさまの栄光を見ていたのです。わたしたちが見なければならぬところはそこにあります。そのイエスさまにこそわたしたちの生きる道がある。単なる人間の誉れで満足してはいけません。大切なことは神さまからの誉れを受けるかどうかです。神さまはイエスさまによって、わたしたちの罪を贖い、不信仰から信仰へと導いてくださいました。そのようにして神さまからの誉れを約束してくださいませ。

天の父よ。あなたがイエスさまの十字架とよみがえりによって、このかたくなな心を溶かし、しなやかな心に変えてくださることを信じます。不信仰から信仰へと絶えず導いてくださることを信じて希望を持って歩んでいけますように。どのような試練の中にもイエスさまを見ることができるよう導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。